

1 「現代における福音派の神学」

関西学院大学神学部 特別講義

一宮基督教研究所:安黒務

2006.6.20

2 概要

1. 序(3)
2. 本テーマについて(4)
3. “ポスト・リベラル”の状況および“世界観の多元性”(5-8)
4. “ad fontem”と主要な展開(9-11)
5. 最近の課題と傾向(12-21)
6. 参考文献(22)
7. 一宮基督教研究所:サイト・アドレス等(23)

3 ★序:簡単な自己紹介

- 関西学院大学経済学部卒・映画部「毎月会」・聖書研究会「ボプラ」所属
 - 生きる意味・目標の喪失
 - ニーチェ著「ツツラウツラウ」を読みあかせる
 - 映画部員に「愛が死ぬる」を推薦し一宮へ
 - M.ウェーバー、大塚久雄、天川源次郎の宗教社会学研究の流れの中で
 - 英国経済の宗教的態度と天職意識の研究
- 細里の教会との交流(客員として)
 - 日本福音教団 山崎教会
 - 細里先生(32年前追悼)、沢先生、日下部先生
 - 山崎教会・神学部卒 井上隆雄さんと「キリスト教神学」翻訳協力(近年)
- 日本福音教団 西宮福音教会で受洗・関西聖書学院(KBI)卒
 - スウェーデン・リベラル系
 - 一種の聖書主義、戦前的でない積極なファンダタリズム
 - ホーネス的な聖性の強調とキリスト教的な聖書の権威の強調
- 東京基督教大学(公立基督教研究所卒・東京基督教神学校)
 - 公開性と現代的なリベラリズムを追求するエヴァンゲリカルリベラリズム
 - リフォーム・ファンダタリズム
 - リベラル派との積極的対話
- 現在
 - 日本福音教団 山崎チャペル 牧師、関西聖書学院 総務部神学教師
 - 一宮基督教研究所 主宰、日本福音主義神学学会 西部部会理事
 - 主要研究・講義担当科目
 - 聖書神学研究:ジョン・E・ワット著「A New Testament Theology」,『新約聖書と神学』
 - 現代神学研究:岡田謙吉著「福音主義キリスト教と神学」,『現代福音主義神学』
 - 総論神学研究:ミラード・J・エリクソン著「Introducing Christian Doctrine」,『キリスト教神学』I〜IV巻
 - 実践神学研究:ジョン・R・W・ストット著「現代の福音的信仰—ローザンヌ聖約」,また「ローザンヌ継続研究シリーズ」

4 ★1. 本テーマについて

1. 福音派とは何か(参:春名純人著『哲学と神学』p.177-)
 1. Historic Protestantism:福音派
 - 聖書を絶対的規範として福音主義諸信条に基づく聖書の恵みによって根本的に規定されている。
 2. Modern Protestantism:リベラル派
 - カント以降の近代的恵みによって根本的に規定されている。
2. 「福音派」—より具体的な定義
 1. 福音主義同盟の信仰告白(1846)(参:宇田道著『総説現代福音主義神学』p.435-)
 1. 1846年にコンスタンツで結成された福音主義同盟の信仰規律(①聖書の神聖感および神性、②聖書解釈における個人的判断の権利および義務、③三位一体の神、④アダムの墮落の結果としての人間の全体的堕落性、⑤神のひとり子受肉・人類の罪のための救いのわざ・彼の神性的な死と支配、⑥信仰のみによる罪人の義認、⑦罪人の回心および聖化における聖書の働き、⑧聖霊の不滅・肉体の復活・信仰者の永遠の祝福と非信仰者の永遠の刑罰を伴うイエス・キリストによる世界の審判、⑨キリスト教伝道者としての神聖の制定・洗礼と聖餐の二礼典の義務とその永続性)
 2. ローザンヌ聖約(1974)(参:ジョン・R・W・ストット著『ローザンヌ聖約—翻訳と解説—』)
 1. 1974年にスイスのローザンヌで開かれた世界伝道会議が公にした「ローザンヌ聖約」の中に表明されている福音的信仰と宣教観とライフスタイルを信守するところの改革派から聖霊派までのキリスト者の群れ、あるいは連合体を意味している。
 2. 聖約の内容は、①神の御言、②聖書の権威と力、③キリストの独自性と世界性、④伝道の本質、⑤キリスト者の社会的責任、⑥教会と伝道、⑦伝道における協力、⑧諸教会の伝道協力、⑨伝道の義務の緊急性、⑩伝道と文化、⑪教育とリーダーシップ、⑫聖霊の賜、⑬自由と福音、⑭聖霊の力、⑮キリストの再臨の十五項からなる長文のもの。

5 ★2. 「ポスト・リベラル時代の到来」と「神学上のパラダイムの多元性の承認」

本文

1. 経緯
 1. 最近までの日本のプロテスタント教会と神学界の状況
 2. 福音派が世界的に台頭・隆起している現象
 3. 「ポスト・リベラル時代の到来」と神学上のパラダイムの多元性の承認
2. 「ハートフォード宣言」(参『新キリスト教辞典』いのちのことば社)
 1. 超越的ディメンションの喪失、現代思想の権位性
 2. キリスト教信仰の近代性(Modernity)への捕囚現象
3. プルトマンの神学的パラダイムの出発点—現代意識に参与し、伝統を再解釈する
 1. 聖書自身の認識論的前提と現代の世俗性の認識論的前提との間のギャップ—認識論的取引—超自然的な装飾を剥ぎ取る
 2. パラダイムの根底—問題性のある想定—認識論的想定への飛躍
 3. 現代人に受容されやすくなるが—誰もそれを特別に欲しないものとなる
4. 宗教における中心的経験—別の現実の浸透の経験—相互浸透における世界観の否定—すべての宗教的経験の否定
 1. 非神話化論争—自然法則が支配する閉じられたシステムとしての世界—異なるコスモスに基づく比喩の使用の断念—「現代意識」を批判的距離を置いて批判しないという欠点
 2. リアリティに対する一定の有効な洞察—有効性のある別の洞察を失った
5. 「世界観の多元性の承認」と「福音派の視点も神学上の知的に生存可能な選択肢」でありうる
 1. 歴史は、ひとつの意識構造を生み、他を消滅させる—どの意識構造も可能な限りの洞察
 2. 「現代意識」—歴史的有効性のある多くの構造のひとつ

6 2. 「ポスト・リベラル時代の到来」と「神学上のパラダイムの多元性の承認」

A. プレ・モダンの時代

1. 宇宙は合理的なものという信念
 1. 二元論的な宇宙—超自然的なもの、自然外のもの
 2. 実在—一観察可能な自然に限定されず

1. 宗教的超自然主義
 2. キリスト教的伝統—世界はひとりの神によって創造・保持
 3. 多神教・汎神論—自然の背後、自然を超えた「ある種の量的存在」
2. プレモダンの見解—目的論的
 1. 「宇宙内にある存在には目的がある」という信仰
 2. 「歴史—秩序だったパターンに従っている」という信仰
 1. 世界の一生—ひとつの物語—どこかに向かっている
 2. 目的・方向性—外部から(神の意思によって)染み込まれている
- ・(参:M.J.エリクソン著『キリスト教神学』第一巻、p.176-)

7 2.「ポスト・リベラル時代の到来」と「神学上のパラダイムの多元性の承認」

B. モダーンの時代

1. 超自然的な基盤・自然外の基盤—捨て去った
2. 垂直的二元論→水平的二元論
 1. 意味・原因—自然界を超えた「上」×、自然界の「内」「背後」○
3. 近代思想—「合理性」「確実性」の強調
4. ジョン・ハーマン・ランドル『近代知性の形成過程』
 1. 「ヒューマニズム」
 1. 人間が実在の中心、万物は人間のために存在、神・天使・天国→「人間」へと主題のシフト
 2. 「自然主義」
 1. 人間の居住環境としての自然の強調、天的・天上→地上への移行
 2. 人間のドラマの舞台—観察可能な宇宙に、自然体系に照らして「人間」理解する傾向
 3. 「科学的手法」
 1. 「自然」を調査・理解する方法の発達・洗練
 2. 次第に—「真理」を調査する唯一の手段として
 4. 「ダイナミックな自然理解」
 1. 全出来事の十分な原因・説明
 2. 人間の起源—神の特別な創造×、生物学的進化論○
5. (参:M.J.エリクソン著『キリスト教神学』第一巻、p.177-)

8 2.「ポスト・リベラル時代の到来」と「神学上のパラダイムの多元性の承認」

C. ポスト・モダーンの時代

1. ダイオジニーズ・アレン
 1. 「モダン全体の崩壊」—四つの領域
 2. 砕け散った西歐社会の四つの柱
 1. 「自己充足的な宇宙」という考えの崩壊
 1. 「科学的思考」の前提—神を排し出す「一宇宙を説明
 2. 信仰—個人的・人格的事柄—観察可能な存在理解—神必要なし
 3. 神についての理論的・合理的認識排除の哲学的議論(ヒューム、カント)—次版あり
 4. 哲学の発展—宇宙論の哲学
 5. ビッグバン理論—「なぜこの宇宙は発生してきたのか?」という問い
 2. 「道徳と社会の基盤」の喪失に失敗
 1. 自律—「合理的な前提」の確立—社会のための「普遍的な道徳・基盤」—理性のみによって論証
 2. 「キリシヤ的」「キリスト教的」原則に基づく伝統的な価値観への執着の固執—失敗は不明確
 3. そうした「価値観」—捨て去る—混沌—旧約的土壌の時代と同様
 3. 「必ず進歩する楽観的主義」の喪失
 1. 社会学—「多岐の問題を解決—他の問題も解決するだろう」との期待感
 2. しかし、教育・社会改革—直面している問題—起こり得る可能性ある問題—解決に疑い
 4. 「知識は良いものである」—中立のもの
 1. 知識—中立的なもの—所有—「用いる人次第」の道徳的価値
 2. 発見—悪いことにも、悪いことになる悪きことにも
2. アレンの判断—キリスト教信仰に大きな好機—障害物・競争相手の除去に作用
3. (参:M.J.エリクソン著『キリスト教神学』第一巻、p.182-)

9 ★3. “ad fontem”と主要な展開

A. 福音派の源流と歴史的遺産

1. 序:「福音派の源流と歴史的遺産」
 1. 重要な三つの要素
 2. 使徒的キリスト教と福音派
 3. 古代教会の正統信仰と福音派
 4. 宗教改革の三大原理と福音派
 5. 近世における四つの流れとアルミニウス主義
 6. プロテスタント教会の信条と十七世紀の正統主義
 7. 敬虔主義の遺産と自由教会の伝統
 8. 近代のリベラリズムと福音派
 - (参:宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』p.49-152)
2. 19世紀後半～現在まで
 1. 19世紀後半から第二次大戦終結までの時期
 2. 第二次大戦後から現在までの時期
 3. (参:熊澤・野呂編『総説現代神学』p.197-204)

10 3. “ad fontem”と主要な展開

B. 十七世紀の正統主義

- (a)プロテスタント信仰の根本
 - ア)宗教改革者たちが書き残した文書
 - イ)一連の信仰告白文書
 - ウ)17世紀に登場した多くの神学的著作
- (b)プロテスタント・スコラ主義
 - ア)宗教改革の業業—体系化・組織化
 - イ)「正統的」—以後のプロテスタント神学の規程・起点
 - ウ)「スコラ的」—体系化の厳密さ、運び方
- (c)正統主義の神学者たち
 - ア)ルター派
 - イ)改革派・スイス(ベザ、トゥレンタン)・オランダ(ゴマルス、ヴォエテウス、コッツェウス)・フランス(アミロー)・イギリス(パーキンス、カートライト、エイムズ)
- (d)正統主義神学への批判

- ア) 時代遅れの方法論 - 近代の学問的な歴史研究、文献批評、批判哲学の登場以前
 イ) 16世紀改革者から後進・進化 - 生命の躍動、創造的動力、自由な開放性から 硬化・主知主義化
- (e) 基本的諸点の総記
 ア) 無批判に、また歴史的状况から切り離して読むべきでない
 イ) プロテスタントの組織的解説の「オリジナル版」を提供している
- (参: 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』p.104-107)

11 3. “ad fontem”と主要な展開 C. 近代のリベラリズムと福音派

1. 啓蒙思潮
 1. 啓蒙とは何か
 2. 啓蒙思潮とは何か
 2. リベラリズム
 1. リベラリズム - 批判・改革の道ではなく、適応・適合の道
 2. J. トーランド「神秘的ではないキリスト教」
 3. ケニス・コーセン「自由主義神学の三つの原理 - ①連続性の原理、②自律性の原理、③動態的な見方」
 3. 福音主義同盟
 4. 20世紀における“新しい発端” K. バルト
 1. カール・バルト
 2. 日本のプロテスタント神学
 3. バルトの聖書観
 5. 現代の「神学的アナキー」と福音派
 6. 結び
 1. 神の無謬のことばとしての聖書の喪失 - キリストご自身の像の喪失
 2. 鋭い時代感覚と高度の学問性 - 「情況性」が認識と行動の決定因
 3. リベラルな思考・信仰 - 「弱体な教会」を結果
- (参: 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』p.125-152)

12 ★4. 最近の課題と傾向

1. エバンジェリカルなアイデンティティ問題 (13)
2. 聖書の無謬性・無誤性をめぐる論議 (14)
3. 神学方法論の問題 (15)
4. エキュメニカル神学の評価とそれとの対話の問題 (16-18)
5. 福音主義の社会的福音 (19)
6. The “wholly” Spiritの探求 (20)
7. 福音と神学のContextualization (21)

13 ① エバンジェリカルなアイデンティティ問題

1. 分離主義的ファンダメンタリズム
 2. 穏健ファンダメンタリズム
 3. 公同的・現代的福音主義
 4. 告白主義的福音主義
 5. 新しい中道・若き福音主義
 6. カリスマ運動
- (参: 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』p.181-185)

14 ② 聖書の無謬性・無誤性をめぐる論議

1. 聖書の性質の規定づけに深い関心
 1. エキュメニカルな神学 - テキストと意味の不可思議な切断
 2. カトリックのアレゴリカルな解釈 - 「テキストに意味されているもの」と「テキストに意味している」とられたものとの分離
 3. 言葉とその意味が解釈の実践において結合されなければならぬ。どんな啓示にもアクセスできず、神秘的な意味だけとなる... 意を適して達成されたテキストと意味の一体性は無謬の言葉のもとで典型的に記述されている。
2. 無謬性と無誤性 - その使用に概念上の差異
 1. Inerrancy: Transmissive, Trajectory, Intentional の各観
 2. Infallibility: Unitive, Essentialist, Christocentric の各観
3. 聖書論の多様化
 1. Absolute inerrancy: 神託的立場... 科学的にも、歴史的にも「exact」な情報の提供と見る立場。
 2. Full inerrancy: 聖書は、それが書かれた時代に文化と伝達手段がどれくらい発達していたかということを考慮に入れて、またそれがどのような目的で与えられたものなのかという観点で正しく解釈するならば、すべての記述において完全に真実である。(M. エリクソン『キリスト教神学』第一巻、p.295)... 科学的・歴史的記述を「exact」とはならず、「phenomenal」あるいは「popular descriptions」と見る立場。
 3. Limited inerrancy: 無謬性を聖書の核心部分を構成している救済的・教理的部分に限定する立場。
 4. Inerrancy of purpose: 聖書の中心的な目的は、キリストとの人格的な関係に導くことであり、この目的を有効に果たすと考える機能論的立場。
 5. 用語自体 - 不適切かつ不毛なものとする立場
4. 解釈学上の考察と聖書の批評学的諸研究の位置づけの問題に関心
 1. ジョージ・E・ラッド著『新約聖書批評学』
 2. ミラード・J・エリクソン著『キリスト教神学』第一巻、第4章「神学と聖書の批評的研究」

15 ③ 神学方法論の問題

1. C. ホッジ: プリンストン学派、現代の証拠主義者
 1. スコットランド常識哲学の立場の影響
 2. キリスト者と非キリスト者の間に「コモ・グラウンド」を想定
 3. あらゆる系列のInferential proofの蓄積
 4. キリスト教のprobabilityを立証
2. A. カイパー、C. ヴァンティル、ウエストミンスター神学: アムステルダム学派
 1. 前提主義
 2. カイパー: the noetic influence of sin と二つの学の主張
 3. 世界観 vs 世界観の対決 - total warの様相
 4. 綿密な証拠の積み重ね以上に、
 5. より根本的な要件 - 前提こそ聖書的でなければ
 6. 万物の存在原理、いっさいの思惟の究極的照合点・意味付与者としての三一神の存在、self-authenticatingである神のみことばとして無謬の聖書 = 大前提
 7. 認識論 = 中心の問題

16 ④エキュメニカル神学の評価とそれとの対話の問題

A. バルト神学に対する見解

1. 対決的見解: C. ヴァン・ティル
 1. カント哲学・キルケゴールの実存主義、古自由主義神学の諸原理との関係を中心に-原理論的分析と批判
 2. 是々非々の分析論的見解: G.C. ヘルカウワーやD. ブローシュ
2. バルトの方法論を福音派の神学方法論構築のためのパラダイムに: B. ラム
 1. 現代の福音主義神学における最重要課題
 1. 正統主義神学に決定的な打撃を与えた啓蒙思想を避けず
 2. しっかり踏まえた神学方法論の確立
 2. 方法論確立のためのmodelあるいは paradigmの必要
 1. バルトの神学方法論こそ福音主義神学の未来を開く方法論上のパラダイムの提供
 2. なぜ、バルトなのか?
 1. オオコギによる歴史的な正統主義批判は妥当視せず
 2. 啓蒙思想と結びついても、その重要な部分を受けとめた上で
 3. 改革主義神学を現代的に書き直した
 3. バルトは、
 1. 近代の歴史的な文脈の批判を受け入れながら
 2. 神のそばとしての聖書の權威を確立する神学的な方法を明らかにした
 4. つまり、
 1. 批評学的研究と神学的解釈論をたくみに総合
 2. 科学時代以前に書かれた聖書の科学時代における位置と權威を確立した

17 ④エキュメニカル神学の評価とそれとの対話の問題

B. 聖書論におけるバルトの方法論

1. 全神学を貫いているモチーフ=神の主権的自由
 1. 神は御自身の恵み深い自由に基づき
 1. イエス・キリストにおける神のユニークな啓示に対する証言である聖書を通して
 2. 聖書に御自身の恵み深い自由に基づき
 2. だが、この語りかけにおいても、神は完全に超越的主権者であり続ける
 1. したがって、この神の恵みのことばは、常に神のことばであって、決して人間が有する経験論的かつ経験的な者目性しはすべてかみろる確実性とはならない。
 3. 神のことばの現在化は、あくまでも神の恵みによる決断と行為による。
 2. 聖書における一神の自由の理解
 1. 神の啓示と聖書との区別
 2. 啓示に対する証言としての聖書
 3. 神のことばと聖書とのdiastasis (離合離間)
 4. 神のことばの保存化、もしくはアクティビスティックな理解
 5. 聖書と神のことばとの間接的弁証法的関係
 3. 近代の聖書批評学からの要請としてのdiastasis (離合離間)
 1. 聖書に書かれた古代の聖書観と人間観、独自の歴史観、宗教的神学的矛盾、ユダヤ的精神など
 2. B. ラムが啓蒙思想との取り組みを言うとき-まさにModernity (近代性)の末としての聖書の歴史的な文脈の批判を考えている
 4. 神の自由を背景としたactivism, actualism
 1. 啓示=信仰実存的原形における出来事、ハプニング(ゲンシヒとしての神)
 2. 「聖書=神のことば」との同一性-一神および啓示の理解
 3. アクティビスティックな啓蒙を導入して解決された
- (参:『福音主義神学』第17号、宇田進論稿「福音主義神学の今日的課題」p.13-16)

18 ④エキュメニカル神学の評価とそれとの対話の問題

C. バルトの聖書論への序説的問題

1. バルトの「神の自由」の理解は十分か?
 1. 神は「主体」であって、決して「客体」とはならない
 2. 啓示の実在性そのものがあやうくなる
 3. 「キリストの人間性はそれ自体啓示ではない」とのバルトの主張
 4. 「バルトのうちに、オッカム以上の唯名論的非合理主義の疑いあり」指摘
 2. 啓示のアクティビズム-独特の発想: 聖書的な根拠をもっているのか?
 1. 聖書-一人間の高徳・越権行為を戒め、神の創造的イニシアチブを強調
 2. それとともに、書かれた神の言葉における神の言葉の現在化を語っているのではないか
 3. 両者を同一視させているのではないか
 3. バルトをパラダイムとしてうけとめるラムの近代理性性に対する対応は十分なのか?
 1. 根本にある問題-信仰と理性の問題
 2. その点において-ラムはかなり混乱しているのではないか
 4. バルトから学び取る
 1. バルトをめぐる諸問題を十分に検討し、
 1. バルト神学の主旋律「恩寵の勝利」-「歴史性」の問題
 2. バルト神学の中心概念「神のことば」-「存在論」的、および「認識論」的な問題
 2. その上で巨星から学ぶべきものを学び取るべき
- (参:『福音主義神学』第17号、宇田進論稿「福音主義神学の今日的課題」p.17)

19 ⑤福音主義の社会的福音

1. ヤング・エバンジェリカル: 革新的な社会論の提唱
 1. 状況倫理はとらないが、斬新なセックス観
 2. 女性の自立・解放論
 3. 人種差別の撤廃運動
 4. 保守政治の否定と良心による政治の推進
 5. 貧困の解決と環境保護のための闘争
 6. 戒律主義と倫理規約の否定
 7. 世俗の中に神を見、
 8. 神を反映するライフ・スタイルの推進
 2. 保守的なアメリカ再建論
 1. 「宗教右翼」-モラル・マジョリティ
 2. 改革派系-クリスチャン・リコンストラクション
 3. 現在の福音派における重要な課題
 1. キリスト教倫理-福音と社会-キリスト教と文化の問題についての議論
 2. 国際情勢と社会変動をしっかりと踏まえたApplied Christianityの積極的な展開
- (参: Richard Quebedeaux "The Young Evangelicals" p.99-134)

20 ⑥The "wholly" Spiritの探求

1. 20世紀における三つの聖霊運動
 1. ペンテコスタ運動
 1. 福音宣教と聖霊降臨の「聖霊のパラドクス」-もしは聖霊らしき経験
 2. リバイバルの神学神学のための興奮状態の強調の影響
 3. 聖霊の臨在としての神の啓示と神学
 2. カリスマ運動
 1. 福音宣教の「神」-カトリックへも広がりを
 2. それぞれの教派の持つ神学と伝統の脈絡にそうがもたでの聖霊経験の受容
 3. 公的教会よりも、個人的な「ペンテコスタ」の中の聖霊の活用
 3. 第三の波
 1. 第三の波における「もしは」-聖霊降臨を神学が「リバイバル」の原則を「ワグナー」の「ペンテコスタ」-福音主義の運動として、

- ・ 米国をはじめとする先進諸国の宣教と教会成長に活用していた
 - ・ パワー・エンカウンター 聖霊と現代の諸書を再び聖霊との対決を強調した宣教師、特に患いのエピソードを強調。
 - ・ (参)C.F.ワグナー「新聖霊の第三の波」
- 福音派における聖霊に関する会議と動向
 - 1974年 ローマンズ会議(神学と宣教のテーマの中で)
 - 「Missionary Spirit」の強調
 - 聖霊のすべての実、聖霊のすべての恩賜の必要性
 - 参)C.F.ワグナー「新ローマンズ宣言」-新説と解説-(p.114)
 - 1985年 オスロ研究会議
 - カリスマ運動の諸論を包含した全体的包摂的聖霊論の書式
 - 「聖霊受領の包括的展開の中に於いて、聖霊の多様な働きを認める」
 - David F. Wells "God the Evangelist - How to the Holy Spirit Works to Bring Men and Women to Faith."
 - 神学の最新動向
 - リベラル神学-聖霊上の「聖霊の消失」
 - 福音派の神学-聖霊の神学と「Spirituality」、の神学に近い傾向
 - (参)M.マクグワン「新ローマンズ宣言」

21 ⑦福音と神学のContextualization

- 1978年 福音と文化に関するウィローバンク研究会議
- ルネ・パピリア
 - 歴史的なアプローチ
 - 今日の信仰の場に関する
 - 福音キリストの歴史的コンテキストを十分にみない
 - 科学的なアプローチ
 - 福音キリストの背景となっている生活の場を学際的に研究
 - 今日の世俗化のコンテキストにおける福音キリストの意味とメッセージを捉えない
 - 文化的なアプローチ
 - 福音キリストの価値がその本来の意味を喪失することなく
 - 今日の世俗化の場での福音キリストの意義を捉える
- 有効な実り多い教義学の展開
 - 文化人類学とエスノグラフィ学を含む
 - 聖霊と福音派を重視する
 - 最近の聖霊学と神学との学際的相互交差と共同研究に
 - 精神医学を中心とする学際的アプローチ
 - 統一性としての人間(the whole person)理解を強調する人間論
 - (参)宇田進「福音派と精神医学」
 - 千年五箇後再臨の再浮上との関連
 - 歴史的成長をめぐる社会的な研究
 - 創造と進化の問題
 - (参)J.エリクソン著「キリスト教神学」第二巻, pp.147-153
- 福音派の神学的努力の基本的スタンス
 - ローマンズ会議からマニラにおける「ローザンヌ」まで一貫して強調されてきた
 - The whole church が, the whole mission の自覚にたつて、The whole gospel を, the whole world に伝えかち合うこと
- エキュメニカル派とも共有するスタンス
 - 相互受領の神学的コンテクスチンが認められるなら
 - 互から共通に採られているマニラ宣言にある聖霊受領の現代的推進に資する

22 参考文献紹介

- 熊澤義宣・野呂芳男編『総説現代神学』宇田進「現代における福音派の神学」
- 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』
- ミラード・J・エリクソン著、安黒務・他訳『キリスト教神学』I～IV巻
- アリスター・マグラス著『キリスト教の将来と福音主義』、『キリスト教の将来』

23 一宮基督教研究所

サイト・アドレス・他

- 〒671-4135
- 兵庫県宍粟市一宮町安黒332 : 安黒務
- Tel&Fax. 0790-72-0235(昼), 63-0252(夜)
- メールアドレス: aguro@mth.biglobe.ne.jp
- メイン HP: <http://www.aguro.jp/>
- 携帯 HP: <http://www2s.biglobe.ne.jp/~aguro/>
- ICIイントラネット: <http://iciici.intranets.co.jp/>